資料文献コーナー　　三冊の「平成」回顧本の紹介　　運営委員　針谷　正紀

元号が平成（1989 年 1 月 8 日～2019 年 4 月 30 日）から令和（2019 年 5 月 1 日～）に代わるに伴い巷にはたくさんの「平成」回顧本が出回っている。西暦論者の私にとって、元号が代わることに特別の感慨はないがこの 30 年という一世代の区切りを機会に日本の政治・経済・文化状況を振り返ってみたいという願望から以前に何冊か読んでいる著者の平成回顧本を購入し読んでみた。その新刊本は次の 3 冊である。

① 平成史　保坂正康　平凡社新書　820 円　2019 年 3 月 15 日発行
② 平成とは何であったのか「アメリカの属州」化の完遂　斎藤貴男　秀和システム　1500 円　2019 年 4 月 10 日発行
③ 平成はなぜ失敗したのか「失われた 30 年」の分析　野口悠紀雄　幻冬舎　1500 円　2019 年 2 月 5 日発行

三冊の概要を紹介することを通して平成 30 年の特徴の一端を振り返ってみよう。

平成史　保坂正康

①の著者保坂正康は 1939 年北海道生まれのノンフィクション作家、評論家で 2004 年、一連の昭和史研究により菊池寛賞受賞し 2017 年「ナショナリズムの昭和」で和辻哲郎文化賞を受賞している。この新書は歴史修正主義批判を根底に実証主義史観に立ち平成の天皇・皇后の動向に視点をあて、論述された平成通史である。

目次は

序　章　天皇の生前譲位と「災害史観」
第 1 章　世界史の中の「平成元年」
第 2 章　天皇が築いた国民との回路
第 3 章　政治はなぜ劣化したか
第 4 章　＜1995 年＞という転換点
第 5 章　事件から見る時代の貌
第 6 章　胎動する歴史観の歪み
終　章　平成の終焉から次代へ

から構成されている。

保坂は 2016 年 8 月 8 日の平成の天皇による自らの生前譲位を認めてほしいと国民に訴えた 2000 字余りのビデオメッセージを、1945 年 8 月 15 日の昭和天皇による玉音放送に匹敵する革命的内容を含んでいると次の 3 点を指摘する。

(1) メッセージの冒頭で「個人として」との表現を用いている。
(2) メッセージの中で摂政と政務代行のシステムを明確に否定している。
(3) メッセージの最後で、国民に直接、ご自身の気持ちを理解してほしいと訴えている。

さらに平成を総括する際に

（１）天皇（人間天皇と戦争の清算の役）
（２）政治（選挙制度の改革と議員の劣化）
（３）災害（天災と人災）の三つのキーワードが不可欠である

と指摘する。

平成とは何であったのか「アメリカの属州」化の完遂　斎藤貴男

②の著者斎藤貴男は 1958 年東京生まれのジャーナリストで新自由主義批判・反消費税論者として名高く、タテマエとしての”平等“さえも破壊された 30 年と平成を総括する。目次は

序章　余計なことばかりした、させられた平成の日本
第 1 章　格差拡大の平成

第 2 章 1995 年（阪神・淡路大震災とオウム真理教事件）
第 3 章　排除と差別の平成
第 4 章　９・１１
第 5 章　アメリカの平成
第 6 章　反知性・反人倫の平成
第 7 章　３・１１
第 8 章　平成と大日本帝国ごっこ
第 9 章　平成の次をせめて「夜明け前」にするために
から　構成されている。

斎藤のこの本は以前に読んだ説得力に満ちた「機会不平等」「消費税のカラクリ」「戦争経済大国」の印象が鮮明だったため３人の中では最も共感度が高かった。斎藤はこの本の「第 5 章アメリカの平成」の中で平成史における新自由主義はアメリカが政府に送りつけてくる「年次改革要望書」に従って遂行されたものであり日本の政財官界が独自に進めたものではなく全ての面で属州としての日本がアメリカのいいなりに展開されたと断言する。

平成はなぜ失敗したのか「失われた 30 年」の分析　　野口悠紀雄

③の著者野口悠紀雄は 1940 年東京生まれの経済学者で大蔵省を経て一橋大・東京大・早稲田大教授を歴任している。アベノミクスと異次元金融緩和は多くの平成の失敗の象徴であり、その検証なしに日本は前進できないと主張する。

目次は
第 1 章　日本人はバブル崩壊に気づかなかった
第 2 章　世界経済に大変化がおきていた
第 3 章　90 年代末の金融大崩壊
第 4 章　2000 年代の偽りの回復で改革が遠のく
第 5 章　アメリカ住宅バブルとリーマンショック
第 6 章　崩壊した日本の輸出立国モデル
第 7 章　民主党内閣と東日本大震災
第 8 章　アベノミクスと異次元金融緩和は何をもたらしたか？
第 9 章　日本が将来に向かってなすべきこと
から構成されている。

野口は平成の時代を経済から見て大きく３つの期間に分ける。第 1 期は 1990 年代で、バブル崩壊によって日本経済が痛手を受け、それまで日本経済を支えてきた金融機関が崩壊した時代で第 1 章～第 3 章で述べられている。第 2 期は 2000 年頃から 2010 年頃までの約 10 年間で、この期間に円安が進み、日本経済は回復したが、これは偽りの回復である。2008 年のリーマンショックで回復過程は急速に終焉し、日本の輸出産業は大打撃を受けた時代であると第 4 章～第 6 章で述べられている。2011 年以降、東日本大震災の影響を受けて日本の貿易収支が大激変した。期待を背負って登場した民主党政権が日本の経済構造を何も改革出来ずユーロ危機で円高が進み、株価が下落したこと、アベノミクスは賃金、消費を増やしておらず金融緩和からの出口がきわめて困難であることを第 7 章～第 8 章で述べられている。

この 3 冊の平成回顧本に共通するのは歴史的事実とデータを重視した記述に徹していることと安倍晋三内閣に対する厳しい批判が各所で展開されていることである。保坂は本来はリベラルな保守主義者であるが、安倍内閣に対しては「これまでの内閣に比べて明らかにさまざまな面で劣っている。まず立法府の軽視、戦後民主主義の否定、ほとんど成り立たない論理の歪み、あるいは人心をとげとげしくしている言動」と怒りを含んだ厳しい批判を浴びせる。私も同感である。